松本清張

迷走地図

上

新潮社

迷走地図 上

松本清張

新潮社

迷走地図（めいそうちず） 上

昭和58年8月5日発行
昭和58年10月10日9刷

著者 松本清張（まつもとせいちょう）

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社
東京都新宿区矢来町71 〒162
電話業務部(03)266-5111
編集部(03)266-5411
振替東京4-808番

印刷 二光印刷株式会社
製本 大口製本株式会社

© Seicho Matsumoto, 1983 Printed in Japan

定価1200円

乱丁，落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-320416-8 C0093

目次

院内紙記者……5
「秘書連合」……26
群像と歳時記……47
陳情処理……66
運転手の場合……86
待つ間に……102
アダムズ135号室……125
激励パーティ……144
クラブ・オリベ……170
織部佐登子の感情……190
求愛の形式……214
手土産……236
大型バッグの効用……259
厄……281
自首……304
事情聴取……323
ペイ・バック……343

装画　滝野晴夫

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

迷走地図

上

院内紙記者

観光バスが来た。

「みなさま。ここは千代田区永田町一丁目でございます。あそこに見える白亜の大殿堂は、ご存知の国会議事堂でございます。昭和十一年に新しく建築され、建坪は約一万二千五百平方メートル、延面積は約五万二千五百平方メートル、高さ約二十一メートル、中央塔の高さは約六十五メートルでございます。正面向って左が衆議院、右が参議院でございます。只今、国会は開会中でございます」

マイクの声につれてガイド嬢の白い手套の先が動く。バスは国会前庭南地区の横にとまっていた。

「衆議院の横手に見えますのが国会内局、衆議院議員面会所、道路をはさんだ左側が衆議院事務局、その南隣が国会記者会館。木立の繁りで見えませんが、そのずっと左手に総理府がございます。真向いが首相官邸でございます。それから、大きな議事堂のかげにかくれておりますが、そのうしろには、衆議院第一議員会館、同第二議員会館、参議院議員会館の三つがならび、各議員の事務所が入っております」

ガイド嬢はマイクを持ちかえた。

「みなさま。この台地付近は標高三十メートル、四方とも坂になっております。北は三宅坂と梨の木坂、それから東西に流れて赤坂見附に出るのが富士見坂でございます。台地の南側には三辺坂、山王坂、グミ坂などがございます。東には汐見坂がございます。霞が関坂と三年坂とがそれとならんでおります」

観光バスはすこし移動して国会前庭南地区の端にきた。車の交通量が多いので、傍に寄って小さくなっていた。

「みなさま、汐見坂がこの坂でございます。昔はこの近くまでが海岸線でしたので、台地上から漁師が汐の流れや満ち引きを観測したというので、この汐見坂と申しました」

白い手套の指先は、汐見坂の下に展開するビル街の上を横に撫でた。

「現在の霞が関は官庁街になっております。ごらんください、すぐ下が外務省と科学技術庁、その左が運輸省、建設省、自治省。道路を隔てた前が農林水産省と厚生省です。左手、皇居とむかい合う屋上タワーの見えるのが警視庁でございます。坂下の右側は、手前から中央合同庁舎、大蔵省、会計検査院、文部省、通産省とならびます」

マイクをまた持ちかえる。

「このようにして台地上が永田町の立法府の中心、台地下が霞が関の行政府の中軸となっているのがよくおわかりになると思います。この結び合せによって、ここが日本の政治の中枢神経になっていることが知られます。みなさま。こうなると汐見坂ではなく、『政治見坂』と改名したくなりますね。……ご退屈さまでした。それでは次に参ります」

観光バスは、春の軽い埃を並木のイチョウの根に舞わせて走り去った。

衆議院第一議員会館、同第二議員会館、参議院議員会館とも七階建てで、コーヒー色をした煉

瓦外装である。北欧の建物のように白枠の窓がならぶ。一階は吹き抜けの玄関、中に入るとロビーで、ここに議員面会人の受付があり、待合室もある。

だれかがその面会受付に記入した面会票を出したとしよう。銀行のカウンターさながらに居ならぶ受付の女性が、当該議員事務所に電話し、諾否の返事をとる。

面会人は受付で捺印された面会票を、低い階段上のせまい出入口に立っている制服制帽もいかめしい守衛に見せる。衛視という。上代宮廷の衛士は衛門府と左右衛士府とに属したが、現代の衛視は議院事務局警務課に所属する。――

いま、衆議院議員会館で面会票をちらりと衛視に示して、エレベーターのある中央ホールにきた身体の小さな中年男があった。

日にやけた扁平な顔は、まん中を金槌で叩きこんだような感じであった。くぼんだ眼は細く、鼻翼はひろがり、口のまわりは年寄りのようにすぼんでいた。うすい髪は、枯れかけた草のように疎らにもつれ、あごの下には胡桃を入れたみたいに咽喉仏が出ていた。

ワイシャツの襟が反っているのは、いつもうつむいてものを書くからで、着古したレインコートの下にある洋服には、メモ帳を突こんでいた。

ホールに入って右には、もう一つ受付があって、女性二人がならんでいた。背の低い中年男は、しじゅうこの議員会館に出入りしているとみえて、顔馴染の受付嬢に挨拶代りの笑顔をむけたが、彼女らはその半分の微笑も返さなかった。

折から、濃いえんじ色の環の中に金色の菊花が小さく光る議員バッジを胸にした青年と、秘書バッジをつけた年配の男と、赤いワンピースの女性秘書とが、横のエレベーターから出てきた。女性秘書は受付に寄って鍵を渡し、なにかを頼んだ。

この受付はホテルのフロント式に会館内の各議員事務所の鍵を出納するキー・ボックスがあり、放送コーナーでもあった。

その議員の運転手を呼ぶアナウンスの女の声が、黒塗りの車の集る駐車場にゆき渡った。玄関先にゆっくりと寄せられた車に乗るため、若い議員はきびきびとした動作で出てゆく。その後姿へ、小さな中年男はせせら笑いを送った。

するとその眼に、衛視の挙手をうけて、ゆっくりとした足どりで、入ってくる初老の議員が映った。

「あ、宮下先生」

男は声をかけた。

「やあ、きみか」

宮下先生と呼ばれた五十八、九の小肥りの議員は、近づく痩せた男を見返った。

「先生、いいところでお眼にかかりました。ちょっと、お耳に入れたいことがあるのですが」

男は、人のいない隅のほうへ議員を誘いかけた。背が低いので、靴先を立てるようにしていた。

「ちょっと、事務所に急用の客が来ているんでね。あとにしてくれるか」

議員は面倒臭そうな顔をした。

「あとで？　じゃ、のちほど先生のお部屋にうかがいます」

「うむ。いいよ」

半分は突放したような答えであった。ホールの右側にはエレベーターが四つならんでいるが、受付に近い議員専用のエレベーターに宮下議員は入った。

あと三つのエレベーターは一般用で、いましも男女十人くらいの上京組がその前に集っていた。地方からきた中年の人たちで、男は風呂敷包み、女は竹かごをさげていた。議員への手土産らし

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

いが、上を笹の葉で蔽った竹かごの中味は、鮮魚のようだった。
エレベーターのむかい側が廊下になっていて、地下一階の議員食堂、地下二階の一般食堂、議事堂へ連絡する地下通路、地下三階の駐車場と地下四階の運転手の休憩室のほうへ行く。ホールの正面はまた受付のようなカウンターがあって、左の奥は議員事務所が七室ならぶ。右へ曲ったところにエレベーターがさらに二つ、はなれたところには荷物運搬のエレベーターもある。それらは奥まっていて、ここからは見えなかった。
眼の前のエレベーターが開き、五、六人の人が出てきたが、その中に記者バッジをつけた男がいた。こっちの男と眼を合わせたが、どちらもそ知らぬ顔ですれ違った。
待っていた上京組がエレベーターに入った。それが地階へ降りるとはわからず、間違えて乗ったのだ。五分の後、一階ホールに上ってきたエレベーターのドアが開くと、再び土産物をさげた男女の顔が現れた。
「どちらからおいでになりましたか」
いっしょになった小さな中年男は、なかでいちばん年とった男にきいた。
「××県の××だす」
関西だった。
「ああそうですか。じゃ、平井先生にご面会?」
「へえ」
選挙区の議員名を即座に云い当てた男の顔を、一行の男女はぽかんとして眺めた。
背の小さな男の名は、西田八郎という。議院内で発行している新聞、いわゆる院内紙の記者であった。ただし、彼は記者バッジを持たず、もっぱら面会票で議員会館に出入りしていた。

西田八郎は、記者バッジを持たないばかりに、かくべつ用のない四階の議員事務所へむかわねばならなかった。面会申込票に記した議員名であった。

議員会館の内部設計はいずれも同一プランで、各階とも議員事務所が両側に二十室ずつならび突き当りに二室。エレベーターの昇降口、湯沸し場、手洗所、物置などを入れた区画が端から端まで中央を縦断していて、これが各議員事務所ならびに廊下を左右にふり分けていた。

いまの西田の眼前には、長い廊下と、それに沿う各室とが、あたかも遠近図法の見本のように先細りとなって遠くの一点へ集中していた。

西田はこの光景を見るたびに、アパート長屋を連想するよりも、若いときに図書館で読んだ村上浪六の「八軒長屋」を想い出すのだった。

浪六といっても、いまの読者にはわかるまい。明治後半の通俗小説家であった。

「八軒長屋」は、路地裏の棟割り長屋が舞台となっている。せまい路地をはさんで左右に一棟四軒がならぶ。まん中に長屋の共同井戸があって、つるべのきしる音が始終聞えている。この見取図が本文の中に挿入されてあった。

それぞれの店子（たなこ）（借家人）の生活を浪六は描いている。現在でいえばオムニバス小説にあたろう。店子が引越して出たり夜逃げしたりすると、挿図でもその家に「貸家」札が斜めに貼られる。家がふさがれば、また新しい店子の生活が描かれる。こんどは向い側の家に「貸家札」があらわれる。

西田が議員会館の中を見るたびに「八軒長屋」の図解を連想するのは、総選挙で落選した議員が会館を立ち退くとき、その移転が暮夜ひそかに行われるからだ。

落選は議員にとって名誉とはいえないから、人目の多い白昼に堂々と事務所を明け渡して退去する勇者はいない。総選挙のたびに議員の三分の一くらいは落ちるが、その事務所は次の借手が

移ってくるまで空いている。西田の眼は、そこに八軒長屋の「貸家」札を浮べるのだった。
彼は、議員会館に「議員長屋」の別称をひそかにつけていた。各階の中央に共同湯沸し場があるのは長屋の井戸と同じだし、女性秘書たちが湯沸し場に集って情報交換のおしゃべりをしているところなどは、長屋の井戸端会議と変りなく思えた。もっともこの比喩は、構造的にはそう云えても、内容的にはかならずしも適切でなかったが――。
各階には、訪問者のため見取図が出ている。党を異にする議員事務所が隣り合っているのは、落選者によってもとの配置が崩れたからで、当選回数の多い議員だけで隣り近所をかためるというわけにはいかなくなっている……。
西田が歩いているとき、アナウンスが騒々しくはじまった。
女性の放送の声は、全館内にひびきわたった。
「浅野先生のお車」
「古光議員の運転手さん」
「江尻先生のお車」
「門田先生のお車」
「近藤先生の運転手さん」
アナウンスはやつぎばやに議員の名を呼び立てた。一階のキー・ボックスのある受付からの放送で、会館の前や地下駐車場に待機している運転手に告げる。さながらホテルの宴会場からの帰り客風景を思わせた。
正午が近い。勉強会と称す派閥の昼飯(ひるめし)会に、会館に残っている議員が召集され、あわただしく出かけて行くらしかった。
西田が廊下に立ちどまって耳をすましたのは、アナウンスに宮下正則議員の名があるかどうか

だった。さきほどエレベーターの前で同議員に遇ったとき、あとから事務所へ来いよと云ってくれた。放送は十数名の名をあげて終ったが、とうとう宮下先生の運転手さんは出ずじまいだった。

西田の足はふたたび動き、中尾秀太議員の事務所へむかった。

中尾は西田が面会票によく利用する名前で、用事がなくても一応その事務所に顔を出さねばならなかった。西田の郷里と中尾議員の選挙区とが同じというだけの因縁だが、中尾も同県同郷人ということから、この院内紙記者の頼みをむげに断りもできなかったのである。

西田は大きな無心をふっかけるわけではなく、いわば会館の中を徘徊するために面会票の名義貸しだったから、中尾の秘書もこれを承服していた。

それと、これは議員のアキレス腱といわれるのだが、もしもそれを拒絶して院内紙記者の反撥を買えば、かれらがどのような悪質デマをまきちらすかわからないおそれがあった。

同一選挙区でも、野党議員にその種の宣伝が流されてもたいしたことはないが、同じ党で、派閥の異なる対立議員派にその悪質な噂が流されると、かなりな打撃になる。選挙時には、とくにそれが影響する。そうなると、敵は反対党ではなく、まさに自分の党であった。——

議員事務所の出入口ドアは閉まっているのもあるし、細目に開いているのもあった。それが半開きになっている部屋に、さきほどエレベーターの中で見かけた鮮魚持参の一組が見えた。内側では、平井議員の、やあやあ、という大きな声と、訪問した支持者たちの高い関西弁とが交わされていた。議員はこれから陳情を聞き、また秘書は院内の見物の案内をつとめなければならないだろう。

西田はその部屋の前を通りすぎ、中尾秀太議員事務所の入口ドアをノックもせずに開けた。

事務所に入ったところがすぐ秘書室で、正面に中仕切りのドアがあり、その奥は、明るい窓を

もつ議員の執務室であった。ぜんたいが二十平方メートルという規格で、秘書室はその半分よりも小さかった。そこに、第一秘書、第二秘書、女性秘書の三つの机とイスが配置され、本棚、書類戸棚、それに来客用の小卓と椅子まであるのだからいよいよ狭かった。机の上には帳簿やファイルや切抜きのスクラップブックなどがならび、書類、伝票、雑誌、新聞まで積まれ、それに電話機二つで、ほとんどスペースがなかった。

それでも狭い場所はそれなりに合理的にかたづけられてあった。

ノックもしないで開いたドアに秘書二人がふりむいた。一人は若い第二秘書で、一人は二十五、六くらいの女性事務員、いわゆる女秘書だった。

両人はふりむいたものの、訪問者が院内紙記者の西田八郎だと知ると、その顔をすぐに机の上にもどして、第二秘書は新聞を読み、女秘書は名簿から名前を抜きリストつくりのつづきに入った。

西田が、今日は、というと、第二秘書は顎をわずかに動かしただけであった。

「先生は？」

西田は女性秘書にきいた。

「外出です。今日はお戻りになりません」

愛想のない声で彼女は答えた。

「そう。じゃ、よろしくね」

西田の声に彼女は黙ってうなずいた。第二秘書は新聞に眼をさらしたままだった。

「いつも、どうも」

部屋を出る前に二人のどちらへともなく西田が云ったのは、面会票で世話になっている礼のつもりだった。

「はい」
女秘書は冷たくこたえ、第二秘書は新聞の上に顎を乗せたかっこうのままでいた。
面会票はいわば議員の好意だが、その旨をうけて階下の受付からの電話に諾の返事を与えるのは秘書だから、この連中に世話になっているのはたしかだった。
それを思うと、西田もつい追従笑いが口のまわりに出て、
「吉田さん。この次にはチョコレートの一函でも持ってくるかな」
と女秘書にいった。
「ありがと」
彼女はにこりともしないで、唇の端をゆがめた。第二秘書は退屈そうにちょっとだけ眼をあげた。
廊下に出た西田は、なにもあんなに秘書たちへ卑屈にならなくても、といういつもの反省が身を噛んだ。たぶんいまごろあの秘書二人は自分をあざ笑っているにちがいなかった。しょぼくれた情報屋さんね、と。
この次にチョコレートの函を持ってくるなどとあの女秘書に云ったのは余計なことだった、と西田は廊下を階段にむかって歩きながら反省していた。自分で云っておきながら、その言葉にいつまでもこだわるのが、われながらどうにもならない性質であった。
これまでも菓子を持参するとあちこちの女秘書に口約束してきたが、あまり実行したことはなかった。それで先方もアテにしなくなっている。中尾議員の気の強そうな女秘書が唇を曲げたのも、空疎なお追従とわかっているからだった。
安いプレゼントが履行できないのも、西田にいろいろとフトコロ都合があるからだった。当座はその気でも、ついつい頬かぶりが便利になってしまう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.